

原著論文

安心の尺度開発  
～信頼性と妥当性の検討～

Development of the An-shin Scale for Japanese  
~Reliability and Validity as Scale~

岩瀬 貴子 (Takako Iwase)\* 野嶋 佐由美 (Sayumi Nojima)\*\*

要 約

本研究は、安心の尺度を開発し、信頼性と妥当性を検討することである。安心Scale102項目は、概念分析や既存尺度を基に作成した。一般社会人と大学生を対象に調査を行った。妥当性の検討に主観的幸福感尺度、精神的回復力尺度を用いた。項目分析、探索的因子分析と確認的因子分析を行い適応度の比較検討を行った。結果、94項目8因子【おだやかである】【不安・苦痛が少ない】【楽観的志向である】【自分を肯定している】【自分に自信がある】【自分で安心できる能力がある】【対人関係の確かさがある】【社会とつながっている】からなる尺度を作成した。本尺度は、十分な内的整合性が確認でき、主観的幸福感尺度と精神的回復力尺度により妥当性が確認できた。

Abstract

The present study aimed to examine the concept of reassurance and develop a scale by which reassurance can be measured.

The present study employed a correlation research study design, and investigated adults and college students. Data were collected using the An-shin Scale, Resilience Scale, and Subjective Well-Being Scale. Item analysis for the An-shin Scale was conducted through I-T analysis. Cronbach's coefficient alpha was performed to examine reliability, and explanatory and confirmatory factor analyses were performed to examine validity.

As a result of a An-shin Scale cancelling an reversal item and carrying out comparison examination of the goodness of fit of explanatory factor analysis and confirmatory factor analysis as a result of analysis, the goodness of fit for 8 theoretical factors based on conceptual analysis was good.

The eight factors were identified as: being calm, with little anxiety or pain, tendency toward optimism, self-acceptance, self-assured, being able to assure oneself, having trust in personal relationships, and being connected with community. A significant and positive correlation was identified between the validity of the An-shin Scale and 2measures of standard related validity as measured by the An-shin Scale factor score.

キーワード：安心 尺度開発 信頼性 妥当性

I. 研究の背景

安心は、看護の基本であるなどとよく記載されているが、その安心の定義はあいまいである。安心の概念は、心理学、社会学、看護学、精神医学など様々な領域において日常的に使用されている。安心とは、元来その語源は、浄土教における安心立命<sup>1)</sup>にはじまり、生死利害の際に

も泰然自若として、心を動揺させないこととし、心を安定させる意味で用いられてきた。また日本人の特有の感性<sup>2)</sup>であると言われている。しかし、安心という言葉は日常にあふれている言葉であり、その意味を具体的に記述しているものは少ない。

また、安心は、本来、乳幼児期に母親とのあいだでの相互関係により生じ得られる安心基盤

\*活水女子大学看護学部

\*\*高知県立大学看護学部

が基になっており、乳幼児にとって、重要他者である母親とのあいだで獲得できた安心基盤は、その人の生きていく上での基盤となるものであると言及されている<sup>3)</sup>。安心は、その人の状態(対自分・対他者的)であり<sup>4)</sup>、その状態は感情とも関係が深く<sup>5)</sup>、安心できる能力が、人が生きていく上でのすべとなる<sup>6)</sup>とも述べられている。また安心は人と人との間の相互作用のプロセスでもある<sup>7)</sup>ため、ライフイベントに対し、どのように感情を伴いながら思考し、安心を獲得するまで、その人がどのような相互作用を行っているのかは、その人自身の安心できる能力のレンジによると考える。

また、一方で、防災や医療事故、政治の目標として安心は安全と横並びに使用されることが多い。原子力安全基盤調査研究“日本人の安全観”<sup>8)</sup>では、安全は、客観的・科学的安全性があり、安心には安全性の認識と安心・不安の感情が含まれるとし、一般人には安心に含まれる認知と感情が分かちがたく結びついていると述べている。

## II. 研究目的

本研究では、「安心」に着目し、安心Scaleを開発し、信頼性と妥当性を検証し、安心の概念規定を試みる。

## III. 安心概念の属性

英文献34、和文献56文献を分析対象とする概念分析を行い、安心の属性を特定化した<sup>9)</sup>。安心(reassurance)の属性として、「おだやかである」「不安・苦痛が少ない」「楽観的志向である」「自分を肯定している」「自分に自信がある」「自分で安心できる能力がある」「対人関係の確かさがある」「社会とつながっている」の8つが抽出された。

【おだやかである】とは、自分の気持ちが、ほっとし、安堵している状態であり、またおだやかであり、落ち着いていると主観的、客観的に評価した状態であると定義づけ、〈おだやかである〉〈落ち着いている〉から構成されているとした。

【不安・苦痛が少ない】とは、自分に関係・関心のある事柄に対して、不安が少なく、また身体的・精神的な苦痛が少ない状態である。不安や苦痛は安心の対極的概念であり、それらを否定することで安心な状態・状況であると定義し、〈心配が少ない〉〈不安が少ない〉〈恐れが少ない〉〈苦痛が少ない〉から構成されているとした。

【楽観的志向である】とは、物事がうまくいくだろうと、明るい見通しをもつさまである。また、不安を減少させるためにも、「大丈夫」などの励ましの言葉をかけることと定義し、〈前向きである〉〈良いように思うようにする〉で構成されているとした。

【自分を肯定している】とは、自分自身を振り返り、自分を認め、自分自身を受け入れている状態であり、自分で自分を支える意味と定義し、〈自分を受け入れている〉で構成されているとした。

【自分に自信がある】とは、自分自身がゆるがない意思を持ち、その意思をもって自律的に行動ができ、自分は大丈夫だと認識をしていることと定義づけ、〈自分がゆるがない〉〈意志をもって行動できる〉〈自分は大丈夫だ〉で構成されているとした。

【自分で安心できる能力がある】とは、人に頼らず、自分自身の力で、安心できるように行う、行動や生きる上での心情をさす。また、必要な情報を得ることで、原因を特定することや、自分の将来をみすえて自分を励まし、予測をするといった、自分で自分を安心させることができる力が備わっていることであると定義づけ、〈原因を特定できる〉〈情報が得られる〉〈予測することができる〉〈将来をみすえる〉〈自分で安心できる〉で構成されているとした。

【対人関係の確かさがある】とは、他者を信じ、人から大事にされることで、人との関係性のなかにつながりを認識することであると定義し、〈人から認められている〉〈人とのつながりを感じる〉〈他者を信じている〉で構成されているとした。

【社会とつながっている】とは、自分が困ったときには誰かがそばにいてくれたり、助けてもらえる環境に自分自身が身を置いていると認

識していることと定義し、<そばにいてくれる人がいる><集団からはずれていないと思う><助けてもらえる>で構成されているとした。

#### IV. 安心scale (原案) の作成

本研究では、「安心とは、環境との相互作用により、その人がおだやかさや、不安苦痛が少ないと感じる状態であり、他者や社会との間で関係性やつながりを認識し、自分で自分を安心できる能力を持ち、自分自身を肯定し、信じ、楽観的な志向で物事を考えられること」と定義し、「安心」の8属性を8構成要素と位置づけた。Scaleの項目は、概念分析で属性を抽出するプロセスで用いたコードを基に構成要素ごとに5～10の項目を作成した。評価しやすいように、簡便な5段階のリッカート評価、評価の段階は、“非常にそう思う”(5点)～“まったくそう思わない”(1点)とし、得点が高いほど安心の状態の程度が高いことを示す。

予備調査として、内容妥当性の検討、表面妥当性の検討、項目分析を行った。

内容妥当性の検討は、看護学の専門家3名、心理学領域の専門家1名に依頼した。検討内容は、①8つの構成要素とすべての項目を一緒に提示し、項目の内容と概念が一致するか、不明瞭な項目がないかを検討する。②構成要素の定義を示しし、全項目を1つずつそれぞれ最も内容を表していると思われる構成要素に振り分けしてもらった。

表面妥当性の検討は、看護系大学生33名に調査を行った。質問項目に回答した後、①回答に要する時間、②項目の用語がわかりやすいか、③回答しづらい項目はないか、④項目の表現は適切かについて記述してもらった。

これら検討結果により、安心Scaleは【おだやかである】8項目、【不安・苦痛が少ない】10項目、【楽観的志向である】10項目、【自分を肯定している】18項目、【自分に自信がある】16項目、【自分で安心できる能力がある】15項目、【対人関係に確かさがある】9項目、【社会とつながっている】16項目、102項目で構成するとした。

#### V. 安心Scaleの開発の調査方法

##### 1. 研究施設と対象者

調査は、一般社会人と大学生を対象に行った。一般社会人は、東海地方の健康診断センター1施設、大学生は、東海地方・中四国地方・近畿地方の6大学を対象とした。

##### 2. 調査内容

妥当性の検討に用いた尺度は下記の2つである。

①主観的幸福感尺度は、伊藤ら<sup>10)</sup>によって、WHOSUBI (The Subjective Well-being Inventory) をもとに、心理的健康の個人差を測る測度として開発されている。本尺度は、人生に対する前向きな気持ち(3項目)、自信(3項目)、達成感(3項目)、人生に対する失望感のなさ(3項目)の4因子12項目から構成されており、開発者により十分な信頼性と妥当性が確認されている。主観的幸福感尺度は、現時点における幸福感を問う尺度であり、安心と同じくポジティブな主観的な評価が行える点で、安心尺度の因子間での相関が期待される。

②精神的回復力尺度 (Adolescent Resilience Scale) は、小塩ら<sup>11)</sup>によって、大学生を対象に開発をしている。本尺度は、個人の精神的な柔軟さや弾力性といった側面を適切に反映しうる尺度であることが示唆されている。また、主にResilienceの高い者 (Resilient) はどのような心理的特性を持っているのかという「個人内資源」に着目しており、心理社会的発達において大きな危機や困難に直面すると想定される青年期を対象にしている。

本尺度は、3因子“新奇性探究”、“感情調整”、“肯定的な未来志向”、21項目から構成されている。

##### 3. データ収集方法

無記名自記式質問紙法により調査を行った。調査の依頼は、健康診断センター・大学における研究協力担当者に対し、文書による依頼を行い、承諾の得られた場所に、研究者が訪問し、対象者への調査票の配布をさせていただき日程等を調整させていただいた。各対象者に対して

は、文書による説明と依頼を行い、各自の郵送による回収を行った。データ収集期間は、平成24年10月～平成25年7月までであった。

#### 4. データ分析方法

分析には統計ソフトSPSS 19.0 for WindowsとAmos19を用い、記述統計量、信頼性分析、妥当性分析を行った。解析データの有意水準は5%未満とした。

#### 5. 倫理的配慮

本研究への研究参加は自由意志であり、参加いただけない場合でも、なんら不利益は生じないこと、無記名のため個人が特定されないこと、データの厳重管理などを明記し、質問紙を配布した。また、個別回収を郵送法で行っているが、研究協力を承諾されたあとでも研究協力の撤回は自由にできるため、調査票には大学名や施設名がわかるようナンバリングを実施している。本研究は、高知県立大学倫理委員会の承認を得て実施した。

## VI. 結 果

### 1. 対象の背景

#### ①社会人

健康診断センターに来所した社会人1,000人に対し、調査用紙を配布し、郵送法にて、426部（約43%）が回収され、その内、欠損値5部を除く計421（有効回答率99%）を分析対象とした。対象者は、男性42%、女性58%であった。平均年齢は、男性56.44（±11.9）歳、女性51.48（±12.1）歳であった。年代別では、23から30歳は12名、31歳から40歳は55名、41歳から50歳は108名、51歳から60歳は108名、61歳から70歳は114名、70歳以上30名と、41歳から70歳までが、約8割を占めていた。

#### ②大学生

研究協力の得られた6大学に対し、1,260部調査用紙を配布し、郵送法にて、530部（約42%）が回収され、その内、欠損値3部を除く計527部（有効回答率99%）を分析対象とした。対象者は、男性13%、女性87%であった。平均年齢は、男性20.37（±2.5）歳、女性20.24

（±3.1）歳であった。年齢別では、18歳は100名、19歳は101名、20歳は126名、21歳は113名、22歳は65名、23歳以上は22名であった。

### 2. 安心Scale（102項目）の項目分析

安心Scale102項目の総得点の平均値は322.64（±48.5）、信頼係数Cronbach's  $\alpha$  : 0.98であった。安心Scale総得点と項目得点の相関係数を検討した。その結果、逆転項目に相関係数が弱いことがわかった。逆転項目を削除したあとの、Cronbach's  $\alpha$ に変化はみられなかった。これらにより、逆転項目の質問項目は、尺度全体にはあまり影響しないと考えられた。全体とのバランスを考え、逆転項目8項目すべてを削除し、94項目版を解析対象として使用することを決定した。

### 3. 安心Scaleの構成概念の検討

安心Scaleの構成概念検討は3段階で行った。第一段階：因子分析（主因子法、プロマックス回転）を探索的に行い、スクリープロットの結果より、因子数を固定し結果を検討（以下、因子分析）。第二段階：第一段階で得られた因子とその下位尺度を基に、確証的因子分析を行い、適合度を算出。第三段階：8構成要素をもとに、下位尺度を作成した原案を確証的因子分析にて適合度を算出。これらを検討した上で、安心Scaleの構成概念を特定した。

#### ①第一段階：4因子からなる安心Scale

第一段階として、安心Scale（94項目）を主因子法、プロマックス回転を行い、スクリープロットの結果より、因子数を4因子に固定し因子分析を行った。その結果、因子に対し0.35以下の項目が、項目32）“病気などで困った時に、自分自身が今、どのような状態（病気の症状など）なのかを知ることができる。”（0.33）の1項目が該当した。次に上記1項目を削除し、再度、主因子法、4因子固定、プロマックス回転で因子分析をおこなった。結果、4因子、93項目に収束された。

#### ②第二段階：4因子からなる安心Scaleの確証的因子分析

第二段階として、第一段階にて4因子93項目で収束した下位尺度を用いて、確証的因子分析

を行った。確認的因子分析の結果の適合度を示す、*RMSEA* 0.035 (0.07以下有効)、*CFI* 0.75、*AIC* 43198.32、 $\chi^2$ : 41488.32、自由度: 12537、有意確率: 0.000でモデルの結果は有効であることがわかった。また、各因子間の共分散は有意であり、因子間相関係数は、 $r=0.66\sim 0.78$  ( $p<.001$ ) であった。

### ③第三段階: 8因子からなる安心Scaleの確認的因子分析

第三段階として、概念分析をもとに抽出した8因子とその下位尺度94項目を確認的因子分析を行った。その結果*RMSEA*は、0.035、*CFI* 0.74、*AIC* 44257.96、 $\chi^2$ : 42397.96、自由度12747、有意確率: 0.000でモデルの結果は有効であることがわかった。また、F1~F8の因子相関係数は、 $r=0.58$  ( $p<.001$ ) ~ $0.91$  ( $p<.001$ ) までとやや強い相関から強い相関まで、すべて正の相関であった (表1)。

これら因子分析を基に算出された結果を、確認的因子分析を行った結果と、概念分析をもとに因子構造を作成し、確認的因子分析を行った結果は、モデル適合度である、*RMSEA*は両者とも0.035であった。そのため、安心の概念を説明することにおいて説得力のある8因子からなる安心Scaleを特定した。

### 4. 安心Scale (94項目) の項目分析

逆転項目8項目を削除した結果、安心Scaleの8つの下位尺度は、【おだやかである】8項目、【不安・苦痛が少ない】6項目、【楽観的志向である】10項目、【自分を肯定している】18項目、【自分に自信がある】14項目、【自分で安心できる能力がある】13項目、【対人関係に確かさがある】9項目、【社会とつながっている】16項目、94項目とした (表2)。

安心Scaleの8下位尺度の平均点、標準偏差、獲得率を確認した (表3)。

表1 8因子からなる安心Scale確認的因子分析結果: 因子間相関係数

|                  | F1     | F2     | F3     | F4     | F5     | F6     | F7     |
|------------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| F1_おだやかである       | -      |        |        |        |        |        |        |
| F2_不安・苦痛が少ない     | .87*** |        |        |        |        |        |        |
| F3_楽観的志向である      | .74*** | .69*** |        |        |        |        |        |
| F4_自分を肯定している     | .87*** | .79*** | .85*** |        |        |        |        |
| F5_自分に自信がある      | .72*** | .69*** | .87*** | .89*** |        |        |        |
| F6_自分で安心できる能力がある | .64*** | .61*** | .80*** | .78*** | .90*** |        |        |
| F7_対人関係に確かさがある   | .74*** | .67*** | .69*** | .90*** | .79*** | .76*** |        |
| F8_社会とつながっている    | .70*** | .58*** | .60*** | .81*** | .65*** | .63*** | .91*** |

Pearson相関係数 \*\*\* $p<.001$

表2 因子毎の下位尺度と標準化係数

因子1\_おだやかである

| コードNo | 下位尺度          | 標準化係数 |
|-------|---------------|-------|
| A_1   | リラックスしている。    | 0.68  |
| A_2   | ゆったりとした気分である。 | 0.79  |
| A_3   | 幸せである。        | 0.70  |
| A_4   | 安堵している。       | 0.80  |
| A_5   | ほっとしている。      | 0.83  |
| A_6   | 気持ちが穏やかだ。     | 0.84  |
| A_7   | 気持ちが落ち着いている。  | 0.82  |
| A_8   | 快適に過ごせている。    | 0.75  |

因子2\_不安・苦痛が少ない

| コードNo | 下位尺度            | 標準化係数 |
|-------|-----------------|-------|
| B_1   | 心配なことが減っていると思う。 | 0.72  |
| B_2   | 不安が緩和していると思う。   | 0.74  |
| B_3   | 不安が軽減していると思う。   | 0.82  |
| B_4   | 苦痛が軽減していると思う。   | 0.78  |
| B_5   | 自分の身体は大丈夫だと思う。  | 0.37  |
| B_6   | 自分のところは大丈夫だと思う。 | 0.63  |

因子3\_楽観的志向である

| コードNo | 下位尺度                     | 標準化係数 |
|-------|--------------------------|-------|
| C_1   | 自分自身が前向きにとらえるようにしている。    | 0.72  |
| C_2   | くよくよ考えてもしかたないと思う。        | 0.67  |
| C_3   | 悩み続けることはしない。             | 0.64  |
| C_4   | あきらめない。                  | 0.49  |
| C_5   | なにがあっても大丈夫だと思うようにしている。   | 0.72  |
| C_6   | なんとかかなんと思っている。           | 0.66  |
| C_7   | 「うまくいくだらう」と思っている。        | 0.73  |
| C_8   | トラブルがあっても「この程度でよかった」と思う。 | 0.50  |
| C_9   | 失敗しても、いい勉強になったと思う。       | 0.59  |
| C_10  | ものごとは良いほうに考える。           | 0.81  |

因子4\_自分を肯定している

| コードNo | 下位尺度                  | 標準化係数 |
|-------|-----------------------|-------|
| D_1   | 周りから受け入れられていると感じる。    | 0.65  |
| D_2   | 自分自身が見放されていないと思う。     | 0.59  |
| D_3   | 孤独ではないと思う。            | 0.69  |
| D_4   | 人からうそをつかれていないと思う。     | 0.44  |
| D_5   | 自分自身から優しい雰囲気が出ていると感じる | 0.59  |
| D_6   | 自分自身が人に対し、友好的だなと感じる。  | 0.58  |
| D_7   | 自分自身が人になじんでいる感覚がある。   | 0.71  |
| D_8   | 自分自身の人間関係が円滑であると思う。   | 0.64  |
| D_9   | 自分自身は、人に近づきやすいと感じる。   | 0.56  |
| D_10  | 自分自身の気持ちが安定していると思う。   | 0.75  |
| D_11  | 自分自身に安定感があると思う。       | 0.66  |
| D_12  | 自分自身のことを隠さなくてもよいと思う。  | 0.58  |
| D_13  | 自分自身が健やかであると思う。       | 0.68  |
| D_14  | 自分自身に対して穏やかであると思う。    | 0.62  |
| D_15  | 自分自身を愛らしいと思う。         | 0.61  |
| D_16  | 自分自身を受容していると思う。       | 0.67  |
| D_17  | 自分自身を許せる。             | 0.63  |
| D_18  | 物事をポジティブにとらえるようにしている。 | 0.66  |

## 因子5\_自分に自信がある

| コードNo | 下位尺度                     | 標準化係数 |
|-------|--------------------------|-------|
| E_1   | 自分自身が間違っていないと思う。         | 0.55  |
| E_2   | 自分自身を支えにすることができる。        | 0.68  |
| E_3   | 自分の判断が間違っていないと思う。        | 0.63  |
| E_4   | 自分は間違っていないと確信できることがある。   | 0.61  |
| E_5   | 自分は「だめ」ではないと思う。          | 0.68  |
| E_6   | 自分は大丈夫だと思う。              | 0.77  |
| E_7   | 自律的(自分をコントロールする)に行動ができる。 | 0.56  |
| E_8   | 主体性を持って行動ができる。           | 0.65  |
| E_9   | 積極的に(物事に)取り組んでいる。        | 0.67  |
| E_10  | 新しいことに挑戦することが多い。         | 0.53  |
| E_11  | できた!と思うことがある。            | 0.61  |
| E_12  | 自分を信じて良かったと思うことがある。      | 0.66  |
| E_13  | 自分自身を励ましている。             | 0.57  |
| E_14  | 自分を励ますことができる。            | 0.75  |

## 因子6\_自分で安心できる能力がある

| コードNo | 下位尺度                          | 標準化係数 |
|-------|-------------------------------|-------|
| F-1   | 困ったときに必要なことを把握することができる。       | 0.61  |
| F-2   | 困ったときに必要なことに関する原因を知ることができる。   | 0.55  |
| F-3   | 困ったときに必要でないものを知る(確認する)ことができる。 | 0.39  |
| F-4   | 困ったときに必要な結果を知ることができる。         | 0.74  |
| F-5   | 困ったときに期待している結果を知ることができる。      | 0.57  |
| F-6   | 専門家に相談できる。                    | 0.43  |
| F-7   | 自分自身にとって、正しい情報を得ることができる。      | 0.65  |
| F-8   | 自分自身にとって、正しい(事実の明確な)説明を受けている。 | 0.57  |
| F-9   | 困ったときに事の成り行きを予測することができる。      | 0.58  |
| F-10  | 将来に向けて前向きにとらえることができる。         | 0.67  |
| F-11  | 将来に向けて準備することができる。             | 0.59  |
| F-12  | 困難な中でも自分らしくあることができる。          | 0.71  |
| F-13  | 困難な中でも自分のペースで行動できる。           | 0.63  |

## 因子7\_対人関係に確かさがある

| コードNo | 下位尺度                   | 標準化係数 |
|-------|------------------------|-------|
| G_1   | 信頼できる人がいる。             | 0.61  |
| G_2   | まわりの人は、他人を信頼していると思う。   | 0.35  |
| G_3   | 自分のことを隠す必要がないと思うことがある。 | 0.47  |
| G_4   | 誰かを信じてよかったと思うことがある。    | 0.60  |
| G_5   | 敬意を示してくれる人がいる。         | 0.61  |
| G_6   | 周りから、隠し事はされていないと思う。    | 0.49  |
| G_7   | 人から認められていると思う。         | 0.77  |
| G_8   | 周囲から認められていると思う。        | 0.77  |
| G_9   | 信頼は取り戻すことが(回復)できると思う。  | 0.45  |

因子8\_社会とつながっている

| コードNo | 下位尺度                         | 標準化係数 |
|-------|------------------------------|-------|
| H-1   | 自分が必要とするときに、つきそってくれる人がある。    | 0.72  |
| H-2   | 自分が困ったときに、そばにいてくれる人がある。      | 0.78  |
| H-3   | 人に気にかけてられていると思う。             | 0.64  |
| H-4   | 自分は見放されていないと思う。              | 0.74  |
| H-5   | ひとりではないと思う。                  | 0.78  |
| H-6   | 人から親切にされていると思う。              | 0.68  |
| H-7   | 人からやさしくされていると思う。             | 0.69  |
| H-8   | 自分自身が周りから、ずれていないと思う。         | 0.48  |
| H-9   | 周りから拒絶されていないと思う。             | 0.61  |
| H-10  | 緊急時、必要な人に連絡がつくと思う。           | 0.58  |
| H-11  | 助けてもらえる。                     | 0.77  |
| H-12  | サポートしてもらえるものがあると思う。          | 0.78  |
| H-13  | 自分が必要とする時にいつでも対応してもらえていると思う。 | 0.69  |
| H-14  | 自分を助けてくれる資源があると思う。           | 0.70  |
| H-15  | 守ってもらっていると思う。                | 0.75  |
| H-16  | 人とのつながりが持っていると感じている。         | 0.73  |

表3 安心Scale因子得点平均値

|               | 項目数 | 最小値 | 最大値 | 平均値(SD)      | 平均値/項目数 | 獲得率% | Cronbach's $\alpha$ |
|---------------|-----|-----|-----|--------------|---------|------|---------------------|
| 安心尺度総得点       | 94  | 150 | 454 | 296.35(47.7) |         |      | .98                 |
| おだやかである       | 8   | 9   | 40  | 25.38(5.5)   | 3.17    | 63   | .92                 |
| 不安・苦痛が少ない     | 6   | 6   | 30  | 17.15(3.8)   | 2.86    | 57   | .83                 |
| 楽観的志向である      | 10  | 11  | 50  | 32.82(6.4)   | 3.28    | 66   | .88                 |
| 自分を肯定している     | 18  | 26  | 90  | 55.57(10.2)  | 3.09    | 62   | .92                 |
| 自分に自信がある      | 14  | 20  | 70  | 42.68(8.1)   | 3.05    | 61   | .91                 |
| 自分で安心できる能力がある | 13  | 23  | 65  | 40.17(6.7)   | 3.09    | 62   | .87                 |
| 対人関係に確かさがある   | 9   | 12  | 45  | 28.09(4.8)   | 3.12    | 62   | .80                 |
| 社会とつながっている    | 16  | 24  | 80  | 54.4(9.9)    | 3.4     | 68   | .94                 |

## 5. 信頼性の検討

信頼性の検討としては、内的整合性をCronbach's  $\alpha$  を算出し検討した。安心Scaleの94項目全体のCronbach's  $\alpha$ は0.98であり、8下位尺度では、【おだやかである】Cronbach's  $\alpha$ : 0.92、【不安・苦痛が少ない】Cronbach's  $\alpha$ : 0.83、【楽観的志向である】Cronbach's  $\alpha$ : 0.88、【自分を肯定している】Cronbach's  $\alpha$ : 0.92、【自分に自信がある】Cronbach's  $\alpha$ : 0.91、【自分で安心できる能力がある】Cronbach's  $\alpha$ : 0.87、【対人関係に確かさがある】Cronbach's  $\alpha$ : 0.80【社会とつながっている】Cronbach's  $\alpha$ : 0.94であった。(表3)

これらの結果により、安心Scaleが下位側面および全体として十分な内的整合性をもつことが示された。

## 6. 妥当性の検討

妥当性の検討として、安心Scaleの総得点、安心Scale各因子得点と、主観的幸福感尺度及び精神的回復力尺度の総得点、またこれらの各因子得点との関連をPearson相関係数にて検討した(表3)。

その結果、安心Scale総得点と主観的幸福感尺度総得点は、 $r=0.70(p<.001)$ の強い正の相関が認められた。また、各因子間相関は、 $r=0.31\sim 0.61(p<.001)$ のやや弱いからやや強い正の相関が認められた。安心Scale総得点と精神的回復力総得点は、 $r=0.49(p<.001)$ のやや強い正の相関が認められた。また、各因子間相関は、 $r=0.24\sim 0.65(p<.001)$ のやや弱いからやや強い正の相関が認められた。



表4 安心Scale総得点・下位尺度、主観的幸福感尺度総得点・下位尺度、精神的回復力尺度総得点・下位尺度、による相関係数一覧

| 既存尺度     |               | 安心尺度    |           |          |           |          |               |             |            |      |
|----------|---------------|---------|-----------|----------|-----------|----------|---------------|-------------|------------|------|
| 尺度名      | 下位尺度          | おだやかである | 不安・苦痛が少ない | 楽観的志向である | 自分を肯定している | 自分に自信がある | 自分で安心できる能力がある | 対人関係に確かさがある | 社会とつながっている | 総得点  |
|          | 総得点           | 0.43    | 0.41      | 0.45     | 0.48      | 0.50     | 0.47          | 0.44        | 0.41       | 0.70 |
| 主観的幸福感尺度 | 人生に対する前向きな気持ち | 0.58    | 0.46      | 0.51     | 0.55      | 0.50     | 0.46          | 0.52        | 0.53       | 0.45 |
|          | 自信            | 0.38    | 0.39      | 0.54     | 0.51      | 0.60     | 0.61          | 0.44        | 0.35       | 0.39 |
|          | 達成感           | 0.35    | 0.31      | 0.33     | 0.40      | 0.39     | 0.40          | 0.38        | 0.39       | 0.36 |
|          | 失望感のなさ        | 0.48    | 0.47      | 0.49     | 0.56      | 0.54     | 0.51          | 0.45        | 0.44       | 0.42 |
|          | 総得点           | 0.46    | 0.41      | 0.64     | 0.58      | 0.65     | 0.64          | 0.51        | 0.48       | 0.49 |
| 精神的回復力尺度 | 新奇性追求         | 0.27    | 0.24      | 0.47     | 0.37      | 0.50     | 0.49          | 0.35        | 0.32       | 0.34 |
|          | 感情調整          | 0.39    | 0.36      | 0.51     | 0.52      | 0.48     | 0.47          | 0.38        | 0.34       | 0.38 |
|          | 肯定的な未来志向      | 0.43    | 0.38      | 0.52     | 0.47      | 0.55     | 0.55          | 0.47        | 0.48       | 0.44 |

すべての相関係数において  $p < .001$

#### IV. 考 察

##### 1. 調査結果からの安心の概念規定

安心Scaleの信頼性は、一貫性の検討を主とした、内部一貫法を用いた。安心Scale94項目全体によるCronbach's  $\alpha$  0.98、8因子それぞれ0.80~0.94の範囲であり、0.7の基準を超えていたため、信頼性は確認されたといえる。

しかし、 $\alpha$  係数は、尺度における質問項目が増えるほど高い数値を示すことが知られているため、本尺度は  $\alpha > 0.8$  を示していることから、信頼性を備えながらも今後は、項目数を削減し、尺度の簡便化に向けた更なる検討を行う必要もあると考えた。

安心Scaleの構成概念妥当性は、因子相関係数は、 $r = 0.58$  ( $p < .001$ ) ~  $0.91$  ( $p < .001$ ) までとやや強い相関から強い相関まで、すべて正の相関であった。したがって、最終的には、8つの構成からなるという論、構成概念妥当性は支持された。

また、安心Scaleの妥当性は、安心Scaleの総得点、安心Scale各因子得点と、主観的幸福感尺度及び精神的回復力尺度の総得点、またこれらの各因子得点との関連をPearson相関係数にて検討した。その結果、尺度総得点間の相関係数、尺度因子間相関係数において、 $r = 0.24 \sim 0.70$  ( $p < .001$ ) であり、すべて正の相関であった。したがって、妥当性は支持された。

本結果の成果に基づき、安心Scaleは8因子、すなわち【おだやかである】【不安・苦痛が少ない】【楽観的志向である】【自分を肯定している】【自分に自信がある】【自分で安心でき

る能力がある】【対人関係に確かさがある】【社会とつながっている】からなると結論付ける。したがって、安心は、【おだやかである】【不安や苦痛が少ない】状態であり、その人が【楽観的志向である】【自分を肯定している】ことで【自分に自信があること】をもたらし、それらが、【自分で安心できる能力がある】と自覚していることである。また、安心は自己のみならず、【対人関係に確かさがある】【社会とつながっている】と、他者との関係や社会との関係のあいだで成立し、獲得している。と定義する。

以上の結果から、安心は、主観的な状態を示す次元、個人の特性・能力を示す次元、他者との相互作用の次元、社会との関係の次元を含む概念であることがわかった。安心の概念もまた発展してきており、本研究の成果としては新たな属性が明らかとなり、安心が「状態」を示す概念から、その人の「能力」そして「社会との関係のなかで獲得・育成」されるという広い視野を含めた概念であることを提案する(図1)。以下それぞれの次元について説明をする。

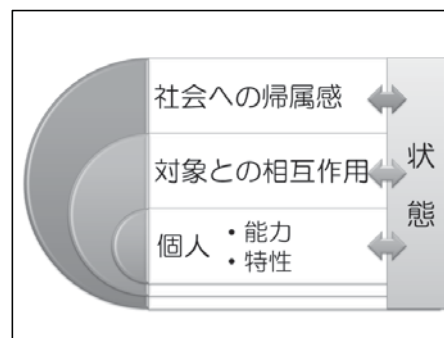


図1 安心の概念とその属性

### 1) 安心は状態である (State)

安心は誰もが望む状態であり、そうありたいと願うものである。日頃、人は、自分が安心しているかどうかと、自問自答する機会は少ない。しかし、本調査の結果からも、安心の状態を表す属性として【おだやかである】【不安・苦痛が少ない】を抽出することができたことは当然といえば当然のことである。今後、安心の状態を把握することが可能となり、アウトカム指標としても使用できると考える。

### 2) 安心は個人の特性・能力である

本調査の結果から、安心には、【楽観的志向である】【自分を肯定している】の個人特性と、【自分に自信がある】【自分で安心できる能力がある】の個人の能力の属性が含まれていることが判明した。自分自身を肯定的に捉え、楽観的に物事を捉える傾向が、その人の安心を導いていると考えられる。また、安心は他者から賦与されるだけでなく、本人が獲得していくことも期待されている。文部科学省においても、学校教育の中でも安全教育を普及することで、安全・安心に関わる能力の育成を目指している。安心であることは、その人が生きていくための基盤<sup>12)</sup>になるといわれているように、安心の概念には、基盤となる個人の特性や能力を内包しているといえよう。

### 3) 安心は対人関係である

本研究の結果から、安心の属性として【対人関係に確かさがある】を抽出することができた。人は、人生において、人々とのかかわりの中で、危機的状況を含む様々なライフイベントを経験しつつ、人との関係を通して、安心を獲得しながら、その危機を乗り越えていると考えられる。安心とは、ストレスがあったとしても、その人自身が持っているソーシャルサポートの質や対人関係の質量が関連していると言えよう。

### 4) 安心は社会的なつながりである

安心の概念はこれまでは、心理的な側面に注目されてきた歴史があるが、【社会とつながっている】という属性が抽出されたことで、社会的な側面が注目されてきたといえる。

社会への帰属感が、孤独感や不安の軽減につながり、安心へとつながっているのではないかと考えた。

これは、安心に関する社会の役割及び責務についても考えるべきことを指摘しているともいえよう。社会的なつながりは、本人の特性や能力という側面もあるが、公助として社会的環境を整えていくことも、現代社会の役割である。人々が安心して生きていくために、社会とつながっているという感覚がもてるよう制度や仕組みをつくっていくことが必要であろう。そのなかで、ひとつの取り組みとして、セーフコミュニティ<sup>13)</sup>がある。これは、誰もが安全で安心して生活できるまちづくりに取り組んでいるコミュニティのことであり、地域住民による、「地域の絆の再生」「行政と市民の協働」といった能動的な街づくりである。一人ひとりが帰属感をもって社会の一員として認識をし、行動化した時、安全安心は変革していくことができると考えた。

## V. 結 論

本研究の目的は、安心の概念とその概念の構造を明らかにし、安心の尺度を開発することである。開発した安心Scaleは、8因子94項目で構成された。因子名は、【おだやかである】【不安・苦痛が少ない】【楽観的志向である】【自分を肯定している】【自分に自信がある】【自分で安心できる能力がある】【対人関係に確かさがある】【社会とつながっている】である。

これらを基に、安心の属性は、安心の対象として、個人の特性や能力、対象との相互作用、社会への所属感に分類ができた。安心は、自分自身を通して獲得し経験を核にして、対象との相互作用や、社会への帰属感をもって、獲得できることが説明できた。

また安心は“状態”を示す概念だけでなく、その人の“能力”そして“社会との関係のなかで獲得・育成”されるという広い視野を含めた概念であることがわかった。また、安心は日頃自明的にその人が感じているいわば潜在しているものであり、なにかの出来事があると、人は意識的に安心をするための方略が生かされるのである。

したがって、安心は、日頃は潜在的になる能力であり、危機的な状況下で顕在化し、いかに発揮されるかが重要になるということが考えられた。そして、社会への帰属感が、孤独感や不安の軽減につながり、安心へとつながっているのではないかと考えた。災害など様々な事象に対し、人は、他人事ではなく、社会に属する一個人として、事象からの学びを積極的に行うことがひいては社会に貢献できる一助となると考えた。

本研究では、安心は状態であるとともに<自己><対人><社会>の3つに大分される構造が考えられた。

## VI. 研究の限界と今後の課題

安心Scaleの限界は、テストの再現を行っていないため、尺度の安定性は検討できていない。また、尺度が94項目と多く、簡便には使いづらい。今後は、尺度の再現性テストを行い、短縮版を作成すること、また、安心Scaleを用いた研究を積み重ねることで、尺度の妥当性を高めていきたい。

本研究は、高知県立大学健康生活科学研究科博士論文の一部を修正して掲載している。また、第17回East Asian Forum of Nursing Scholars, Philippian, Manilaにて発表した。平成23年～25年度学術研究助成基金助成金（基盤研究C：課題番号23593480）の助成を受けて実施した。

### <引用文献>

- 1) 岩本裕：日本仏教語辞典、29、平凡社、1988.
- 2) 都甲潔：感性の起源、7～15、中公新書、2004.
- 3) Bowlby, J. , 二木武監訳：ボウルヴィ 母

と子のアタッチメント 心の安全基地、30～44、医歯薬出版株式、1993.

- 4) 豊廣隼人、渡辺弘純：対自的対他的安心感は希望に肯定的な影響を与える、愛媛大学教育学部紀要、54(1)、21-31、2007.
- 5) 中村功：日本人の安全感、原子力安全基盤調査研究、平成14～16年度報告書、2004.
- 6) 山岸俊夫：日本の「安心」はなぜ、消えたのかー社会心理学から見た現代日本の問題点、p164～166、集英社インターナショナル、2008.
- 7) Speckens AEM, Spinhoven P, Van Hemert A M : The Reassurance Questionnaire (RQ) psychometric properties of a self-report questionnaire to assess reassurability. Psychological Medicine Jul, 30(4), 841-847, 2000.
- 8) 前掲5)
- 9) 岩瀬貴子、野嶋佐由美：安心の概念分析、高知女子大学看護学会誌、39(1)、2-16、2013.
- 10) 伊藤裕子、相良順子、池田政子、川浦康至：主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討、心理学研究、74(3)、276-281、2003.
- 11) 小塩真司、中谷素之、金子一史、長峰伸治：ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性ー精神的回復力尺度の作成ー、カウンセリング研究、35、57-65、2002.
- 12) 前掲3)
- 13) 白石陽子：WHO「セーフコミュニティ」モデルの普及に関する研究ー「予防」に重点を置いた安全なまちづくり活動が世界的に普及する要因に関する考察ー、政策科学、15(1)、27-40、2007.